

川北 稔著

『工業化の歴史的前提——帝国とジェントルマン——』

見市 雅俊

イギリス帝国史から生活史まで広い範囲におよぶ川北氏の活躍はよく知られている。本書は一九六〇年代以降の氏の主要論文に大巾な加筆をおこない、さらに全体のおよそ五分の二におよぶ新稿を加えたもので、氏の長年にわたる研究の集大成である。

本書を一貫するテーマは序に述べられるように「帝国」と「ジェントルマン」であり、この二つをイギリス近世史（一六—八世紀）について「表裏一体」のものとしてみようとするのが氏の基本的な立場である。そして「工業化」の起源については本書ではこの「帝国」「ジェントルマン」の枠組のなかでもっぱら必要ないし消費の側面から論じられることになる。氏自身はこれを従来の生産偏重の経済史にたいする「補完」（三七四頁）の作業とこころえているようであり、その限りでは「工業化」の経済史的な説明としては不十分なままにおわっている。評者自身は本書のタイトルとサブ・タイトルは逆にしたほうがよかったようにもおも

うが、それはともかく、本書の最大の功績は近世をこえて二〇世紀までイギリス史の中心部を貫く帝国の展開とジェントルマンの支配についてひとつの壮大な歴史のビジョンを提起したことに求められよう。

ところで、知られるようになって日本でのイギリス史研究では近代化のトレイガーとして独立小生産者をとるかジェントリーをとるかの大論争があった。川北氏自身もその渦中にあつたようにもうが、本書では氏はこの論争自体には直接ふれず、後者の説が今ではほぼ「定説」化しているとごく簡単にそれを片付けている（序および二六九頁）。「定説」化したと言えるのどうかはともかく、評者自身はこのジェントリー説を支持するものであり、一六世紀についての越智武臣氏、一九世紀についての村岡健次氏のすぐれた研究のあいだの時代を埋める本書の刊行によってわれわれはここにジェントリーを軸にしたイギリス史の一貫した展望をもつことができた。今後のイギリス史研究はこれまでに以上にジェントリーを主軸にして語られることになるにちがいない。

イギリス史と書いてきたが、川北氏がめざすのは従来の狭い意味での国民史の枠を突破することである。氏の言うように一九六〇年代までの歴史研究では日本史も含めて、ヨーロッパ、というよりもイギリスをモデルにした「一国的・単線的な発展段階論」（三七九頁）の普遍的な妥当性が、たとえばかつての大塚史学をめぐる論争においてもその両当事者によって共有されていた。それは自明の大前提であった。氏はこの前提そのものを「帝国」史の方向をとることによってのりこえようとする。その場合に氏が手がかりとしたのはウォーラー・ステインに代表される従属理論であった。そして氏はイギリス史についてのジェントリー論と従属

理論とを結び付けるものとして西インド諸島に注目した。本書の第二部、『商業革命』の展開は西インド諸島の砂糖貿易を中心にした従属理論の具体的な展開部分であり、本書の白眉とでもいうべき内容になっている。ウォーラスティン、および西インド諸島史のウィリアムズについては氏自身が訳業の労をとられているけれども、この第二部で示された氏の実に緻密な実証作業をみれば、これらの人々のシェーマは氏によって完全に消化され、より充実したものになっていることがわかるだろう。氏は単なる最新流行の学説の紹介者ではないのだ。

この第二部にたいし第一部の「工業化前の経済変動」はその導入部の性格をもっている。そこではブルジョワ革命を中心にすえたかつての歴史分析の方法は否定され、人口動態を軸に一六—八世紀のイギリス国内の社会と経済の動向が分析される。第三部の「帝国とジェントルマン」では一七世紀後半以降の商業革命が本国のジェントリー体制にどのように影響し、また、イギリス国民の生活をどう変えたのかが分析される。ここでは「生産に対する消費、労働に対するレジャー」（三八〇頁）の復権をはかる意図から生活史の視点が重視される。

こうして従来の生産中心の経済史にたいしては人口史、生活史などの新しい手法をとりこんだ経済史が、そして閉ざされた体系としての一国史観にたいしてはよりグローバルな歴史観が対置されることになる。

以下、内容の要点と私なりの問題点を述べるが、その前にもう一言、全般的な印象を述べておきたい。川北氏は本書のなかで個々のテーマについて要をえた研究史上のまとめと論点の整理をお

こない、そのうえで着実な実証作業をふまえた氏自身の見解をその独特の歯切れのよい（おそらくそれぞれのテーマの専門家にとっては歯切れのよすぎる）文体によって示している。論理の展開も首尾一貫しており、一氣に読みとおすことができる書である。

第一部の内容は次のようにまとめられよう。一六世紀前半までの経済成長ののち後半以降は「経済の拡大が人口増加に吞み込まれる」（二二頁）前工業社会期固有のパターン、すなわち「マルサスの罠」の状態になる。ホブズボウムを批判しつつ川北氏はこのことがいわゆる一七世紀の全般的危機の本質なのだとする。氏によれば、「ホブズボウムの議論は、生産力と生産関係の矛盾という公式をむき出しの形で呈示した」ものでしかない（六一頁）。この批判がそのまま、かつて日本の学界であればど熱烈に論じられたブルジョワ革命論にたいする批判でもあることは言うまでもないだろう。

こうして本書の出発点は人口動態におかれる。なお川北氏は「一六世紀の人口増加の窮極的原因」は明らかにできないとするが（二〇頁）、これは人口史研究そのものの内在的な限界によるものでいた仕方ない。しかし、氏は続けて言う、「その結果だけは明らかである。」人口の激増は有機物に食糧だけでなく原材料から動力源までも依存する前工業期の社会では社会システムそのものの危機を意味した。つまり人口の激増はそのまま「資源・食糧・エネルギー危機」を意味したのである（六二頁）。評者自身はこのような歴史の因果関係のシステム論的、エネルギー論的な説明には大いに共鳴するけれども、現在の日本の学界でそれがど

これまで受け入れられるのか大いに興味のあるところである。

ではこの危機はどのようにして克服されたのか。川北氏によればそれは、「国土の拡大……新たな貿易の開拓、農業改良、工業用の原料や燃料の転換」などの道筋をとるはずであり、事実、イギリスでは一七世紀の後半以降、これらの課題が次々に達成され、「工業化の前提条件」が整えられる（四四頁）。そして氏はそのなかでも、「国土の拡大、すなわち重商主義帝国の形成とそれに伴う『商業革命』こそ『最大の脱出口』であったとするのである（六二頁）。

その他の脱出口についても、のちの商業革命の「予行演習場」（七八頁）となる一六二〇年代を境目とした毛織物貿易の市場、製品の質、商人層にかかわる構造的な転換が記述され、さらに農業改良についても人口動態と、のちの「生活革命」との関連で分析がおこなわれる。しかし、「工業用の原料や燃料の転換」については氏はほとんど分析をおこなっていない。それは国内産業の内的な発展よりも海外市場からのインパクトのほうを重視しようとする氏の基本的な立場からすれば当然なのかもしれないが、実は氏自身のシェーマのなかでこの転換は非常に重要な位置をしめているのである。それは次のようなことである。

川北氏によれば植民地市場の発展によってイギリスは「毛織物をほとんど唯一の輸出産業とする単一商品輸出型経済から複数の工業製品輸出をもつ経済構造」への転換をとげた（八五頁）。この工業製品とは氏が「雑工業製品」と呼ぶもので、「絹や綿……、鉱物類、ガラス、皮革、石けん、ロウソク」等をその内容とし、そしてその多くは、『早期産業革命』において成立した新工業の

製品であった。」氏の分析によればこれらの新工業の「急成長を支えた」のは「西インド諸島と北米の新市場」であり、従って、「イギリスによる植民地物産の再輸出貿易とは、つまるところ植民地に輸出された工業製品の価値実現の過程にほかならなかったのである。」（以上、一〇六―一〇七頁）

つまりイギリスによる中継貿易の拡大が「オランダ型」のそれに傾斜しなかったのはこの貿易に平行して「早期産業革命」による国内工業の発展があったためである。「早期産業革命」といえばすぐに思いうかぶのはネフの古典的なテーゼであろう。それは一六世紀の後半から一七世紀の前半にかけてイギリスでは石炭エネルギーへの大転換があり、それに伴って大陸依存から自主的な技術開発への脱皮、大規模企業の成立、ガラスにみられる、工芸的な質的生産から量的生産への転換等々、一言でいえば「工業文明」の成立があったとするものである。川北氏は一六世紀の後半を経済の停滞期とみる立場からその時期の解釈をめぐってネフを次のように批判していた。「少数のマイナーな産業の成長をとらえて、全国的な経済動向を論じる」ことは不適切であり、『早期産業革命』などという用語をつくりあげたネフの態度なども、誤解を招きやすいというほかない。（二八頁）ところがすでにみたように一七世紀の後半以降の文脈では逆に氏は「早期産業革命」の意義を積極的に評価するのである。（なお三三―三五頁も参照）

ネフのテーゼについていえばたしかに川北氏が批判したように一六世紀の後半に彼のいう革命の効果が即効的に現れたかのようには主張するのは誤りかもしれない。そもそもネフのテーゼはエネルギー転換を中心とするその内容からいって短期的なものでは

ありえないからである。しかし、ネフのテーゼが川北氏のいう「雑工業製品」の起源の有力な説明になっていることは明らかであらう。

国内産業の構造的な転換が植民地帝国の成立をうながしたのか、それともその逆であったのか。この問題について川北氏がこれまで支配的であった前者の見方にたいし、後者の見方がありうることを論証したことはたしかであるけれども、「早期産業革命」―「雑工業製品」の道筋を氏自身はどうとらえるのかを示さない限り、最終的な回答を出したことはないのではないだろうか。

第二部は冒頭に述べたように本書の最も特色をなす部分である。川北氏はそのなかで西インド諸島を「核」(一四四頁)とする一八世紀イギリスの重商主義帝国の構造を明らかにする。なかでも一四一頁の植民地帝国の構造の図解は大変貴重なものとおもわれた。そして第六章で西インド諸島の社会と経済の構造が見事に解明される。さらにそれが本土におよぼした影響が分析され、そこから、「奴隷貿易こそがイギリス産業革命のもっとも重要な起源であった」(一四三頁)とする刺激的な結論が導き出される。そして氏は砂糖植民地がもし存在しなかったならば、「旧植民地・重商主義体制が成立しなかったはずなのである」と断言する。第三部を射程に入れたつ氏は次のように言う。

「……砂糖植民地の奴隷制プランテーションこそは、イギリス本国に市場と原料・材料、いまや基礎食品化しつつある砂糖などを供給し、工業化の資金の一部を提供しながら、本国上流社会のラッシュの『ジェントルマン』の性格を温存する安全弁ともなったの

である。」(一九九頁)

つまり紅茶には砂糖という生活様式からジェントリー支配までが氏によれば実はカリブ海に結び付くというのである。

続く第七章はウォーラスティンらの従属理論が本書のなかでは最も意識的に応用されたところである。川北氏はここで砂糖植民地と北米―煙草植民地について比較分析をおこない、何故、前者は「徹底した従属と『低開発』を強いられ(二二五頁)、一方、後者は「辺境化」されず、「独立し、やがて工業化してゆく」のか(二〇三頁)を明らかにする。その最も基本的な契機のひとつは、「紅茶と一体となってイギリス人の食生活の柱のひとつとなった砂糖と、つまるところ嗜好品の域を出なかった煙草との商品そのものの性格の違い」であった(二三九頁)。それによる「イギリス市場への依存度」の違い(二三八頁)がこの二つの植民地の運命をわけたのであった。

このように川北氏の西インド諸島史論はまさに革命的といってもよいほどに大胆なものである。はたして氏が先に引用したような、歴史家にとってはタブーのはずの「イフ」の論法まで用いて強調するほどに一八世紀のイギリスにとって西インド諸島が重要だったかどうか、評者自身には残念ながらそれを判断する能力はない。ただ、このような見方はイギリス人による研究に追隨している限りけつて獲得できるものではないことは強調しておかなければならない。この点については氏のウィリアムズについての訳業の「訳者あとがき」のなかで氏自身が率直なたちで述べているのでそれを読みたい。

さらに第二部の第八章では川北氏は同じような手法でポルトガ

ルの「従属化」を分析する。また第五章第四節ではオランダ・マナーが一八世紀の英仏の商業戦争の帰趨を決したのではないかとする、これもまた刺激的な見方が示されている。

第三部ではその副題にあるように、「『商業革命』期の社会」が扱われる。そのうち第九、一〇章では「重商主義的対外発展」が「商人」ジェントルマン、ストック・ジェントルマン、植民地ジェントルマンといった新型の『疑似ジェントルマン』を大量に生みだし（二八四頁）、そのことが一八世紀の「相対的安定」をもたらしていくことが記述される。そうしてこれらの多様なジェントルマンのありようについての立ち入った分析がおこなわれる。ここでは川北氏は当時の文献や手稿を駆使して、ジェントルマンの生活の実態を明らかにしていく。本書の第一と第二部では氏の高度の数量的なデータの処理に、そしてここでは氏のより、オンラインドックスな史料操作の手腕に読者は圧倒されるにちがいない。最後に川北氏は一八世紀にみられた西インド諸島と本土のジェントリー社会の構図は、「東インドでも、アイルランドでも、また世紀が進行しても同じだった」との長期的な展望を示している（三五一頁）。

最終章の「工業化の生活史的前提」は評者にとっては最も問題の多いところであった。川北氏の出発点は次のようなことである。「生産や所得の歴史は、ひとがなにゆえに生産し、何のためにより多くの所得を望んだのかという『生活史』的考察によって、つねに補充される必要があるのではなからうか。」（三七四頁）氏の

いう工業化の生活史的な考察とは生産―労働を捨象した、需要―消費のそれであり、さらにつきつめれば生活意識ないし消費意識のそれである。

川北氏によれば一八世紀のイギリス国民は他に類をみないような、「強烈な、しかも全国的・全階層的にかなり等質化した消費意欲」（三七三頁）を見せるようになったという。それは氏のみるところ、商業革命による「非ヨーロッパ世界からの文物の流入」「新しい消費習慣」（三五八頁）を背景に、「生活意識」の決定的な転換があったためである。この転換の内容とは疑似ジェントルマンの成立にみられるように社会的な地位が以前のような出自によってよりも、生活―消費のスタイルや所得の額によって決定されるようになった、一言でいえば、「ブルジョワ的な社会構成の原理ができあがった」（三六五頁）ということである。そして氏は一般民衆もまた、貴族を頂点とする「上流気取り」（スノビズム）の競争にすでに参加していたのだということを非常に強調する。すなわち、「ステイタス・シンボルとしての消費をより、下層の民衆が真似る傾向が急速に広がった。」（三五七頁）そうして、「労働者はより高い所得を求めて農場から工場へ……陸統として移動しはじめ、低賃金で生活に窮さない限り労働の意欲をもたない」という『反転労働供給線』は消滅する。（三七〇頁）

こうして、「つねに一段上の消費生活をめざしてあくせくする近代型スノップ」こそ「工業化の生活史的前提のひとつ」だったのである（三七三頁）。

以上に要約されるような工業化のいわば精神的な起源としてのスノビズム論が、かつて大塚史学でいわれた生産―ユーリタ

ニズムの禁欲精神の構図を文字通り裏返しにした議論であることは明らかである。生産にたいしては消費、禁欲にたいしては欲望の開放。そして大塚史学にみられたような「理想主義」的な要素はここには少しもなく、その議論はシニカルでさえある。事の善悪は一切抜きにして、ここに、常に生産を考えなければならなかった貧しい時代の日本におけるイギリス史研究と豊かな時代のそれとの違いをみることも可能だろう。その意味で本書はまさに八〇年代である。

次に、一般民衆についての川北氏の記述はあまりにも印象主義的であり、そしてあまりにも段階論的である。

一般の民衆が川北氏のいう一八世紀の「生活革命」にまったく無縁であったとおもわれない。それは本書のより、経済史的な部分で論証される全般的な生活上の事実から十分推測できることである（第四章参照）。しかしながら本章では氏は当時のイギリスの警世家あるいは外国人旅行者ののこした文章をもとにして一般民衆の「奢侈」の傾向をあまりにも印象主義的に論じている。たとえば三五九頁ではH・フィールディングが引用されているが、彼は首都の治安の問題を殊更に強調すべき立場にあったことをおもえば、その発言内容は相当に割引いて受け取る必要があるだろう。

さらにいえば、川北氏が一八世紀イギリスについて引用したような当時の奢侈論は特殊イギリス的なものであったのだろうか。たとえばモンテスキューの『ペルシア人の手紙』のなかでは全く同類の奢侈論がフランス社会について展開されているのである。

また、川北氏が本章でおこなう奢侈禁止法の分析、あるいは重

商主義者の賃金論の推移の分析はそれ自身として興味深いものだが、それも一般民衆の消費性向の現実に直ちに結び付くものかどうかは大いに疑問である。

そして「生活意識」あるいは「労働のモチベーション」の変化についての川北氏の議論はあまりにも段階論的である。氏がいう「必要」から「生活水準の向上」への「労働のモチベーション」の移行（三七〇頁）は、つきつめて言えば、古典的なシェーマでいわれる資本主義的な賃労働の成立を「生活史」「消費」のタームで言い換えたものにはすぎないのではなからうか。氏のいう「生活革命」が「政治革命」を消費の次元に翻訳したものであるという性格をもつように。かつての政治革命と工業化の単線的な結び付きを否定しながら、およそ「革命的」な変化と縁遠いはずの生活史ないし社会史の領域で「生活革命」を論じ、さらにそれを工業化に直結させるのはいささか皮肉である。

生活史を文字通り日常茶飯事の次元にかかわる歴史とすれば、そしてそれを工業化の歴史に結び付けようとするのであれば、たとえば川北氏によれば工業化の初期に成長したという製造業、すなわち、繊維品、装身具、陶器、台所用品等の、かつては「半奢侈品と考えられたに違いない消費材」（三七四頁）について、他の部分で用いられたような数量史的な手法によって分析を進めるべきであったろう。そのような手順を経ることによってのみ、一八世紀、一般民衆もふくめたイギリス国民の生活様式はどこまで変わったのか、あるいは変わらなかったのか、そして工業化と「生活革命」の関係はどのようなものであったのかをはじめて語ることはできないのではないだろうか。

以上、本書の全体からみれば「辺境」のところで批判をおこなうという、いささかアンフェアな書評になってしまった。繰り返しになるが、本書の最大の功績は、評者だけでなく、おそらく大半の西洋史研究者にとってこれまで「世界地図上のちっぽけなしみ」（一九五九頁参照）でしかなかった西インド諸島が実は近世イギリス社会の発展にとってきわめて重要な意味をもっていたことを明らかにしたことである。ここには過去をたえず再発見し、

再構成していく歴史研究者のあるべき主体的な営みの姿をみるこ
とができよう。そうした川北氏の姿勢はイギリス史研究という狭
い専門領域の枠をこえて広くうったえる力をもつようにおもわれ
る。

（A5判 三八一頁 索引九頁 一九八三年一月
岩波書店 四八〇〇円）
（和歌山大学助教授